

〈客員教授プロジェクト成果刊行〉

フランシス・オルセン著 寺尾美子編訳

『法の性別——近代法公私二元論を超えて』

(東京大学出版会 2009年 246頁 ISBN978-4-13-031182-3 4800円+税)

館 かおる



1996年に改組されたジェンダー研究センターは、外国人客員教授招聘制度が設置され、国際的なジェンダー研究を目指す、国立大学では日本で唯一の研究機関となった。以来2007年3月に至るまで、海外からのジェンダー研究者を客員教授として招聘し、夜間セミナーと称する講義を中心に研究プロジェクトを実施した。これまでジェンダー研究センター客員教授の夜間セミナーの記録を中心にした成果刊行は、御茶の水書房から『シリーズ国際ジェンダー研究』として4巻刊行している。本書については、夜間セミナーの講義及び日本の研究者のコメントからなる第2部と共に、法学者である寺尾美子東京大学教授の編訳によるオルセン教授の重要な論考を訳出した第1部を加えた、充実した内容の本として刊行することができた。以下、本書の構成を紹介しておく。

〔I〕法の性別

第1章 法の性別

第2章 家族と市場——公私区分の二元論的理解

第3章 アメリカ法の変容とフェミニズム法学

〔II〕連続講義 近代法公私二元論を超えて

第1講 「公私」の区別：法が抱く社会のイメージ——公私二元論批判総論

〔第1講へのコメント〕 公私二元論批判と日本の文脈 (中山道子)

第2講 市場と女性——女性の法的平等と労働保護立法

〔第2講へのコメント〕 「性の平等」をめぐって——女性労働者保護のゆくえ (浅倉むつ子)

第3講 家族と女性——自由主義的家族法改革の効用と限界

〔第3講へのコメント〕 実質的な平等と改革に向けて (棚村政行)

第4講 国際人権法と女性——「MEN」に女性が含まれるために

〔第4講へのコメント〕 エッセンシャルイズムと国際水準 (神長百合子)

第5講 性に関する権利、生殖に関する権利、そして性的暴力からの自由

〔第5講へのコメント〕 性に関する権利は法の世界でどのように扱われてきたか——日本の状況と今後の課題 (角田由紀子)

〔連続講義に寄せて〕 法学とジェンダー研究の邂逅 (館かおる)

編訳者あとがき (寺尾美子)

アメリカのフェミニズム法学は、1995年以降の日本での法制定の動きを推し進め、1999年の男女共同参画社会基本法の制定や2000年の男女共同参画基本計画の策定、そして2001年の「ストーカー行為等の規制等に関する法律」、2002年の「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律 (通称DV

法)の制定や政策の施行に少なからぬ影響を与えた。本書は、アメリカのフェミニズム法学の担い手であるオルセン教授の論文や講義と、その後本格的に日本のフェミニズム／ジェンダー法学の構築に参加した日本の法学者のコメントが収録されており、既存の法学の脱構築に挑戦し、法政策に展開していった当時の様相が垣間見られ興味深い。

オルセン法学の圧巻は、社会の思考体系とシステムを枠づけている、法学という学問の専門知に対する疑義を、フェミニズムやジェンダー視点からの「知の組み換え」を行って見せたことにある。また本書は、多数の文献に加えたオルセン教授の長文の解説注を読む事により、アメリカの法学界におけるフェミニズム法学の議論の軌跡を辿ることができる特色を有している。

構築された法律文書の解釈ではなく、「法」により構築されている社会の構造を見据えた見方ができるように、これまで強固に形成され「則することが当然」と見なされてきた「法」を変革する「知」の地殻変動を呼び起こすために、オルセン法学の特色である「難度の高い論題を回避せず、明晰な説得力を持って示し得る質の高さ、深さ」を目指すこと。それこそが、これからの日本の「法」の構築を育む、大きな力となると思われる。果敢なる読破を薦めたい。

(たち・かおる／ジェンダー研究センター教授)

<客員教授プロジェクト成果刊行> 既刊・近刊

『シリーズ国際ジェンダー研究』御茶の水書房

第1巻 『国際フェミニズムと中国』 タニ・E・バーロウ著

第2巻 『グローバル化とジェンダー表象』 ヴェラ・マッキー著

第3巻 『フェミニズムで探る軍事化と国際政治』 シンシア・エンロー著

別巻 『中国映画のジェンダー・ポリティクス——ポスト冷戦時代の文化政治』 戴錦華著

別巻(近刊) 『フィリピンにおける女性の人権尊重とジェンダー平等』(仮題)

キャロリン・ソブリチャ著